

都道府県立図書館における地域資料サービスの現状と課題 ー収集を中心にー

菅原 由乃

地域資料とは、「当該地域を総合的かつ相対的に把握するための資料群」及び「地域で発生するすべての資料および地域に関するすべての資料」を指す。地域資料サービスは、全国の公共図書館で実施されており、公共図書館の一般的かつ重要なサービスであると捉えられる。しかし、地域資料サービスに関する全国的な調査・研究や概説書は多くない。特に、近年の技術の発展や社会の変化に伴い、ポーンデジタル資料や地域の記憶といった、地域資料として収集すべき新たな資料が出現していると指摘されている。しかし、これらの収集に関する実態は明らかにされていない。

そこで本研究では、21世紀の地域資料サービスの展開の流れを明らかにすること、地域資料サービスの現状と課題を主に収集の面から明らかにすることを目的とする。これによって、21世紀の新たな地域資料サービスの発展に寄与することができると考える。

本研究では、文献調査と質問紙調査を実施した。文献調査では、21世紀の地域資料サービスをめぐる議論の動向を明らかにした。質問紙調査では、全国の都道府県立図書館の地域資料サービス担当館の回答から、地域資料サービスの現状と課題を明らかにした。

調査の結果、21世紀初頭には、地方分権改革や情報化の推進といった社会の大きな動きに乗じて、地域資料サービスの重要性や公共図書館で実施することの意義が主張されていた。その後、技術の進歩に伴う社会全体のデジタルへの移行から、公共図書館においても地域資料のデジタル化及びデジタルアーカイブへの関心が高まり、更にそれらのオープンデータ化や他館・他機関との連携が議論されるというように展開してきたといえる。

現在の公共図書館の地域資料サービスにおける大きな関心は、やはりデジタル化・デジタルアーカイブにあると考えられる。しかし、特に市町村立図書館では人手・予算不足が課題とされている。そのなかで都道府県立図書館は、これらの実践経験が豊富であること、人手や予算の規模が比較的大きいこと、元来広域連携を担う図書館であること等から、中心的役割を担うことが期待されている。デジタルアーカイブの普及によって、広域連携・市町村支援という都道府県立図書館の役割が再確認されている。都道府県立図書館の存在意義という点からも、デジタルアーカイブは重要な取り組みであるといえるだろう。

また、今後都道府県立図書館の地域資料収集において重要になるのは、ポーンデジタル資料であると考えられる。収集の必要性は2000年代初期から訴えられているものの、現時点では課題も多い。今後図書館内での位置付けが明確にされ、様々な取り組みがなされることを期待したい。また、現在のデジタル化対象の中心は貴重資料や一枚ものの資料となっているが、著作権の保護期間が満了したばかりの地域資料のデジタル化を随時進めていくことも、利活用の促進に繋がると考えられる。

(指導教員 白井 哲哉)